水戸市常磐町所在

しちめんせいとうじょ
七面製陶所

—平成17年度確認調査現地説明会資料—

平成17年11月6日（日）　午後13:00～

水戸市教育委員会

（1）確認調査の概要

【調査期間】　平成 17 年 10 月 3 日（月）～平成 17 年 11 月 14 日（月）

【調査主体】　水戸市教育委員会（生涯学習課文化振興係）

【調査目的】　七面製陶所を構成していた連房式登窯の所在確認と操業形態を把握するための国・県費補助による学術調査

（2）七面製陶所の設置～閉鎖の流れ

年代	出来事
文政 12 年（1829）	徳川斉昭（烈公）が 30 歳で第 9 代水戸藩主となる。
天保元年（1830）	藩内の陶土の調査を実施。常陸太田在の町田と下野の小砂村で陶土を発見。
天保 2 年（1831）	通事伊藤友寿を京都へ派遣し，陶器製法を研究させる。
天保 4 年（1833）	陶土の産出地である町田と小砂に窯を築きたかったが，藩内事情から実現できなかったため，第 1 回目の就封（帰国）の時，お手もと金で水戸の城東，下町の瓦屋（瓦谷）に陶器製造所を開設。
天保 5 年（1834）	陶器焼成が軌道に乗りはじめ，翌 6 年春には磁器の焼成に成功。
天保 9 年（1838）	神崎七面堂の下に七面製陶所を設置し，瓦屋の製陶所もここへ合併する。窯場（「好文亭四季模様之図」）は，千波湖に面した崖下に設置され，「びいどろざいく御家」，「白やきせとや」，「御役人」，「諸事御せ戸やき場」などの施設があり，3 基の連房式登窯も描かれている。
天保 11 年（1840）	製陶所を視察。
天保 12 年（1841）	肥前唐津の陶工傅五郎を雇い，製陶所の拡張準備を行うが，藩内事情から陶業拡大政策は進展しなかった（斉昭は製陶所を七面，町田，小砂の 3 箇所に設け，小砂のものは水戸の城下や江戸，あるいは那珂川の上流筋など運送の便の良い方へ出荷し，町田のものは太田で売りさばけば，かなりの利益が見込めると考えていたようである）。
天保 13 年（1842）	偕楽園が開園される。
弘化元年（1844）	斉昭が幕府から致仕謹慎を命ぜられ，水戸藩の天保改革は挫折する。
明治 4 年（1871）	廃藩置県が行われ，幕府の資金的援助を失った七面製陶所も閉鎖された可能性が高いと考えられるが，正確な閉鎖年代については不詳。

（3）確認調査の成果

【窯跡と灰原を確認】　調査着手前に下草刈りを行ったところ，1984 年に水戸市立博物館で開催された「水戸藩のやきもの」展の図録において指摘されていた位置（以下，A地点という）から，陶磁器類や窯道具の破片が採集されたことから，トレンチを設定し，掘り下げや拡張を行った。その結果，本地点から連房式登窯（丘陵の傾斜面を階段状に整地し，燃焼室を連続して構築した地上式の窯）の最上段の燃焼室の砂床（燃焼質の床に敷く砂層。焼土や炭化物，陶磁器類が混じっている）の一部と関連する灰原（商品として売れない陶磁器類の失敗品や不要となった窯道具の捨て場）を確認することができた。七面製陶所

の廃絶以降の土地改変や水路の埋設による攪乱を大きく受けており，遺存状況は良好とは言えないが，砂床とみられる砂の広がりから燃焼室は奥行き 2.0m，幅 4.0m 以上の広さを持っていたと推定される。砂床については，部分的に，断面を断ち割った結果，さらに下からも煉瓦や陶磁器類の破片，窯道具の破片が大量に出土し，その下から別の砂床が確認された。そのことから，この窯は一度，壊されて再度，同じ場所に作り替えられていたものであることが明らかとなった。

この窯は「好文亭四季模様之図」（宜遷画作，幕末と明治の博物館所蔵）の最も東側に描かれている「諸事御せ戸やき場」と考えられる。灰原からは 2 万点以上の陶磁器類と窯道具の破片が出土した。

また，この窯跡から南西方向に 75m 離れた位置（以下，B 地点という）からは別の窯に関連するとみられる灰原が確認された。

【性格の異なる 2 つの灰原】　A 地点の灰原からは，サヤや輪トチと呼ばれる重ね焼きをするための焼き台が大量に出土しており，半磁器の土瓶類の破片もたくさん出土していることから，半磁器の土瓶等を焼成する窯に関連する灰原であったと考えられる。他方，B 地点の灰原からは半磁器の土瓶の破片なども僅かに出土しているが，下絵の施された素焼きの土瓶や土瓶の蓋，徳利の破片で，キキョウ台やツクと呼ばれる重ね焼きをするための焼き台がたくさん出土している。そのことから，B 地点の灰原は素焼き窯で焼成したが，失敗したものや工房などで行われる絵付に失敗した素焼きのものを廃棄した灰原と考えられる。

【窯の覆い屋と工房の屋根は瓦葺きだった】　A 地点の付近からは近世瓦の破片が少なからず出土している。A 地点の窯が「好文亭四季模様之図」の最も東側に描かれている「諸事御せ戸やき場」であったとすると，窯の東側には屋根を持つ施設が併設されていたことになる。常磐公園攬勝図誌続編原稿・窯場之図（松平俊雄著）によると，窯の覆い屋は甍の部分に丸瓦が葺かれているが，屋根の大部分は板葺きか茅葺きのように表現されている。他方，陶工たちが陶磁器を成形したり，乾燥させる工房は庇の部分は板葺きか茅葺きのようであるが，さらに上の方は平瓦がきちんと並べられているように表現されている。このような絵画資料から出土した近世瓦は窯と工房の屋根に葺かれていたものと考えられる。

【多様な土瓶の絵付】　土瓶とその蓋のいくつかには，白泥でススキが描かれたものやイッチン描き（土を溶かし、細い筒や紙の先に金具を付けたものに流し込んで文様を描く技法）で表現された鳥や鳳凰などのほかに，これまで知られていなかった梅の枝に花や蕾が咲いている様子が描かれている下絵を持つものがあり，斉昭が造成開園した偕楽園を描かせていた可能性がある。

【磁器の焼成に成功していた】　これまで七面製陶所では土瓶や徳利などの半磁器類を焼成していたことが表面採集資料によって知られていたが，今回の調査では，土瓶，蓋，徳利，行平鍋，鉢などの半磁器類とともに肥前系とみられる磁器の染付碗などの破片が A 地点の灰原から出土し，磁器の焼成に成功していたことが裏付けられた。こうした資料は，斉昭公が天保 12 年（1841）に肥前唐津の陶工傳五郎を雇い，製陶所の拡張準備を行ったという事実を間接的に示唆するものである。

【偕楽園の押印】　花生と思われる比較的厚い素焼きの破片と蒸し器とみられる素焼きの破片に「偕楽園」と書かれた瓢箪形の押印がされたものが確認された。個人蔵資料で「好文亭四季模様之図」とみられる絵が描かれている半磁器の花生や陶器の花生にも同様の押印がされており，ボストン美術館

所蔵のエドワード・シルベスター・モースコレクションの花生（陶器ヵ）にも同様の押印が見られる。

今回の調査によりこうした押印が施されている資料が七面製陶所で生産されたことが確実となった。

（4）調査の意義と課題

これまで存在が指摘されていながら，操業形態や生産された製品の全容が不明であった七面製陶所の一角において発掘調査が行われた意義は大きい。現時点では西限を確定できていないが，確認できた範囲について，まずは周知の埋蔵文化財包蔵地として登録し，周知化を図る必要がある。

今回の調査では 3 基あるとされる連房式登窯のうち 1 基を確認することができた。遺存状況は良好とは言えないが，復元整備を行っていくのであれば，同時期に操業していたと考えられる小砂や町田の窯跡の事例を参考に復元していくことは可能である。

また，関連する灰原の部分的な調査により，操業形態の解明や町田焼や小砂焼との比較検討を行っていくための多くの基礎資料を得ることが出来た。

未確認となっているほかの 2 基の連房式登窯や関連施設の所在と遺存状況については今後，早急に確認する必要がある。「好文亭四季模様之図」に描かれた西側の 2 基の連房式登窯は国指定史跡名勝「常磐公園（偕楽園）」の指定地内に眠っている可能性があり，指定地内を調査するには文化庁記念物課や茨城県教育庁文化課との連携も必要となってくる。

窯跡の操業形態や粘土の供給源などを復元していくためには，出土した 100 箱以上の陶磁器類と窯道具の分類，組成比率などの定量的な分析を行うとともに，陶磁器類の胎土分析などの理化学的分析を行う必要がある。

さらに，七面焼の流通範囲を把握するために，市街化が進んでしまっている武家屋敷や城下町の範囲においても積極的に調査を行うとともに，これまで市内で行われた発掘調査において出土した近世陶磁器類についても再度調査を行い，七面焼が含まれていないかを確認する必要がある。

こうした基礎的作業を積み重ねていくことにより，斉昭公が開窯した七面製陶所をめぐる陶磁器生産の歴史を復元していくことが可能になる。

参考文献・図版出典

大川　清　1985　『小砂焼』日本窯業史研究書

河野一也・水野順敏・河野真理子　2004　『町田焼窯跡』水府村教育委員会

成瀬晃司　2001a　「4 生産遺跡　窯の形態」『図説　江戸考古学研究事典』（江戸遺跡研究会編）柏書房

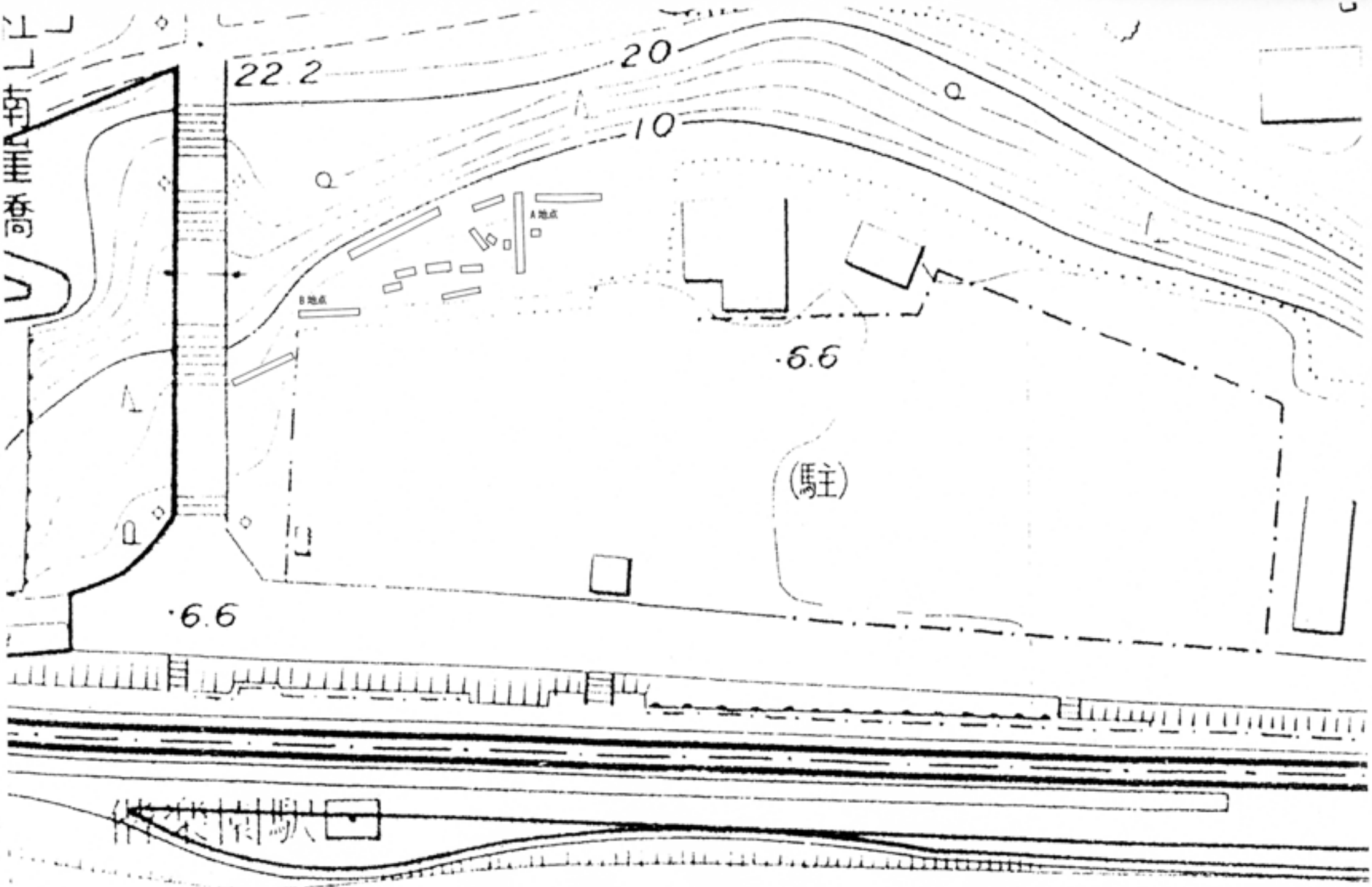
成瀬晃司　2001b　「4 生産遺跡　肥前の連房式登窯と窯詰め」『図説　江戸考古学研究事典』（江戸遺跡研究会編）柏書房

水戸市立博物館　1984　『郷土の伝統産業　特別展　水戸藩のやきもの』

Morse,E.S.　1912　*CATALOGUE OF THE MORSE COLLECTION OF JAPANESE POTTERY*.Boston,Boston Museum of Fine Arts.

「好文亭四季模様之図」部分（七面製陶所付近）

幕末と明治の博物館所蔵（水戸藩のやきもの展チラシから転載）



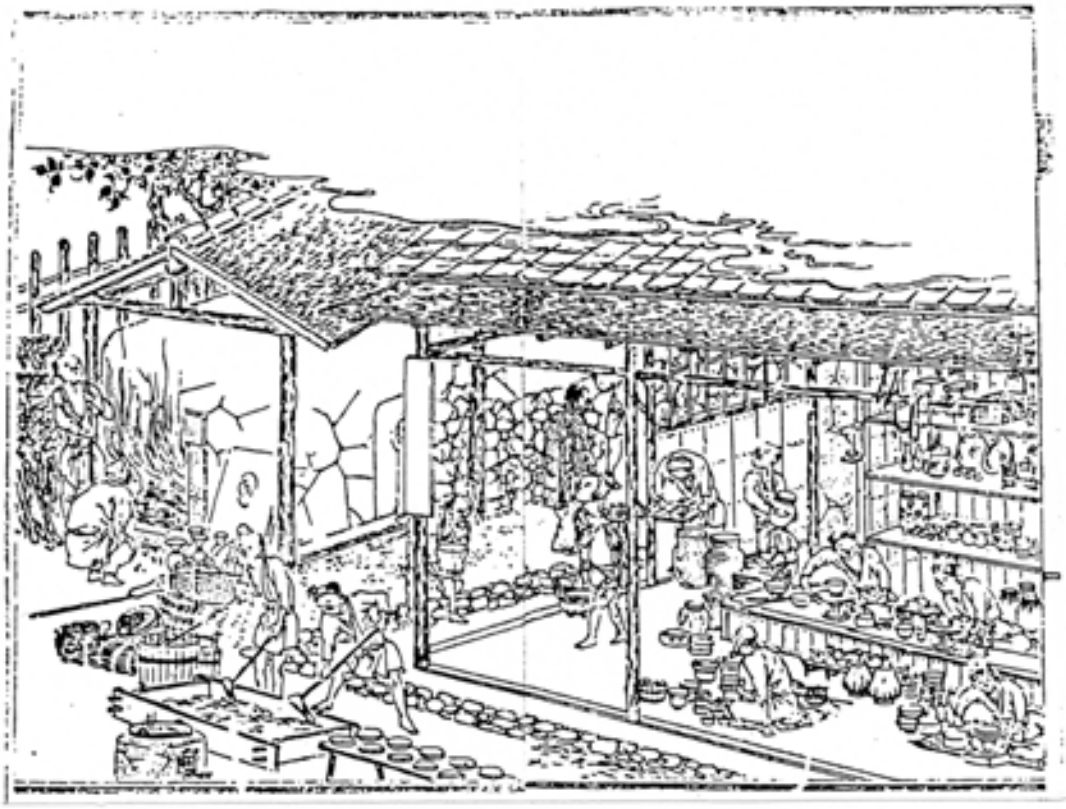
調査地点の位置（S=1:500）

水戸藩および近隣諸藩の窯場

（河野・水野・河野　2004 の第５図を転載）

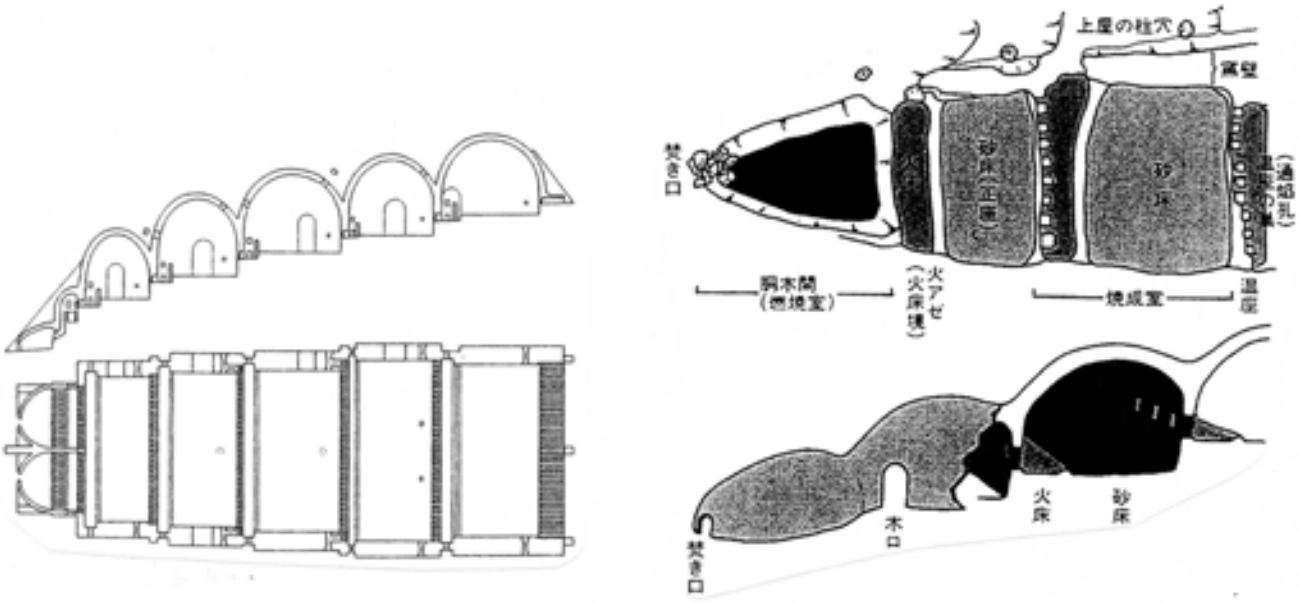
1．七面製陶所（水戸藩）2．町田焼（水戸藩）3．小砂焼（水戸藩）4．桃源焼（水戸藩）5．松岡焼（水戸藩）6．どびん焼（水戸藩）7．勿来焼（棚倉藩）8．笠間焼（笠間藩）9．宍戸焼（宍戸藩）10．岡野台焼（黒羽藩）11．益子焼（黒羽藩）12．志島焼（烏山藩）13．成田焼（旗本領）14．平野焼（宇都宮藩）

（■水戸藩で磁器をめざした窯　●水戸藩で陶器をやいていた窯　▲他藩の窯）



常磐公園攬勝図誌続編原稿・窯場之図

茨城県立歴史館所蔵(大川　清 1985『小砂焼』日本窯業史研究所の図 10 から拡大)



連房式登窯の形と構造（成瀬　2001a，2001b より転載）

CASE 15

1575 1573 1599 1603 1617 1604 1616 1607 1614 1610 1608
1602 1615
1568 1601 1600 1581 1583 1582 1584 1580 1611 1613 1609 1612

1578 1576 1569 1570 1567 1571 1574 1593 1597 1589 1587 1585
1566 1572 1565 1564 1588 1592 1595 1591 1586 1594 1590

1619 1621 1618
1622 1635 1623 1647 1625 1624

1668 1665 1666 1667 1653 1669 1658 1648 1704 1695 1646 1628 1652 1656
1631 1686 1684 1697 1676 1683 1637 1657

1638 1642
1649 1620 1634 1632

1633 1636 1690 1639 1696 1641 1675 1682 1681 1680 1679 1694 1699 1627 1644 1651 1643 1626 1629 1640 1672
1674 1686 1677 1654 1650 1645 1630 1670 1671

PROVINCES OF KII AND IGA

1578 番の花生の体部に瓢箪形の押印「偕楽園」が見られる

(CATALOGUE OF THE MORSE COLLECTION OF JAPANESE POTTERY より転載)

CASE 12

PROVINCES OF YAMATO, ECHIZEN, CHIKUGO, IYO, SHIMOTSUKE, KŌZUKE, HIDACHI, AND MINO

1357番の皿の底面に瓢箪形の押印「偕楽」が見られる

(CATALOGUE OF THE MORSE COLLECTION OF JAPANESE POTTERY より転載)